

垂迹としての聖徳太子

—— 早島有毅「聖徳太子信仰と三国仏教史観」によせて ——

吉 田 一 彦

一 三国の高僧と聖徳太子

初期真宗の高僧連坐影像

浄土真宗の寺院では、インド（天竺）、中国（震旦）、日本（和朝）の高僧（先徳）たちの影像を描いた絵画（掛軸）が、法物として用いられている。現在用いられているのは七人の高僧が描かれるもので、「三朝高祖真影」（七高僧影像）と呼ばれ、「上宮太子真影」と呼ばれる聖徳太子の影像とともに、二点並べて本堂の余間に懸けられるのが一般的である。

三国の高僧や聖徳太子の影像は、いわゆる初期真宗の時代から用いられていた。だが、それらは現在用いられている図像とは大きく異なる姿をしていた。それらが今のような形に定型化されたのは、本願寺が親鸞

系諸門流の多くを傘下に収め、それらを横断的に統合する宗教団体を築きあげてから後のことで、十五世紀末～十六世紀以降のことである。現在につながる定型化された図像は、この時期、本願寺によって行なわれた法物の統一によって成立した。

それ以前の、初期真宗の時代の三国の高僧たちの影像は、いまだ定型化されておらず、描かれる人物に出入りがあり、像様も多様だった。また、勢至菩薩像がしばしば描かれ、独特の姿をした聖徳太子および六人（もしくは四人）の侍臣の影像が同じ掛軸の中に描かれることがあった。そうした高僧連坐影像は、初期真宗の多くの門流で用いられており、親鸞およびその系統の諸門流の思想を説明する上で重要な史料になっている。親鸞系諸門流の歴史的特質、社会的特質を明らかにするには、高僧連坐影像の研究に正面から取り組み、その思想を究明する必要がある。

幸い、その現存事例は少なくなく、かなりの点数を確認することができ
る。だが、それら高僧連坐影像に包含される思想はとても難解で、容易
に現代人を寄せつけないところがある。

高僧連坐影像については、宮崎圓遵氏による研究^①があり、その後『真
宗重宝聚英 八 高僧連坐像』^②によって多くの史料の集成がなされ、ま
た、早島有毅氏による同書の解説論文^③によって基礎的な研究が進展した。
さらに、近年、早島氏はこれまでの研究成果をふまえて長篇論文を発表
し、いくつかの重要な論点を提示している。^④二〇〇九年一〇月、同朋大
学仏教文化研究所「日本仏教の成立と展開」研究会、聖徳太子信仰研究
会、宗教史研究会の三会合同の研究会が、同朋大学で開催された。ここ
では、研究会における早島報告に対する私なりのコメントを述べることに
したい。

三国仏教史観と三国世界観

中世の日本では、世界を、インド、中国、日本の三国を基軸に理解す
るという三国世界観がしばしば語られた。これは、もともと仏教から出
た世界観で、日本の仏教をインド、中国、日本の三国伝来のものと認識
する考え方から生じた世界観であった。こうした観念の成立とその特質
については、高木豊氏^⑤によって先駆的な研究がなされ、その後、前田雅
之氏^⑥、末本文美士氏^⑦、伊藤聡氏^⑧、市川浩史氏^⑨、横内浩人氏^⑩、平雅行氏^⑪
などによって、多様な分野からの論究がなされて、研究が大きく進展して

いる。

それらによるなら、古代においては、インドが強く意識されるような
ことはなく、むしろ中国とともに、高句麗、百濟、新羅など朝鮮半島の
国々が意識されるのが一般的だった。だが、平安時代になると、朝鮮半
島の国は後景にしりぞき、しだいにインドが観念的に意識されるように
なっていったという。なぜか。日本は、中国文明圏の周辺国の一つとし
て、中国に対する劣等意識を懷きつつ、自らの位置を認識していた。だ
が、仏教という文脈にそくして言えば、文明の中心であるはずの中国の
向こうには、より上位の価値を持つ天竺（インド）が存在した。インド
を前面に持ち出すことは、中国の優越性（中華思想）を相対化すること
になり、そこから、日本は中国と対等であるとか、あるいは中国よりも
上位にあるとするような意識が生み出されていったという。インド、中
国、日本という三国意識は、自国を世界の中で強く意識していく自国意
識と一体の意識であった。三国を意識することは、また日本を意識する
ことであり、そうした中からさまざまな言説が生まれ、自国優越意識に
基づくナショナリズム的な、あるいはエスノセントリズム的な言説も唱
えられるようになっていったという。

前田氏によれば、そうした世界像／自国像が語られるようになるのは
九世紀のことだった。末木氏は、そうした思想が語られた最初期の文献
として護命（七五〇～八三四）や安然（八四一～？）の著作を取りあげ
たが、前田氏は安然を独善的自国優越主義者の祖と見ることができると

説き、平氏は護命を日本優越論の原型をつくった人物だと論じている。そうした意識は、最初是一部の学僧のものであったが、平安時代を通じて進展、流通し、院政期には一部の学僧のみならず、仏教界全般に広がりを見せ、さらには世俗社会にも浸透していったという。

聖徳太子信仰の深化

このような国家意識の変化に歩調をあわせるように、その存在感を増幅させていったのが聖徳太子だった。聖徳太子は『日本書紀』で誕生し、奈良時代には早くも聖徳太子信仰の第一段階というべきものが成立していた。奈良時代末期く平安時代になると、それにさらにたくさんさんの聖人譚、神秘譚が付加、増幅されて、聖徳太子信仰の第二段階が進展し、その人物像は雪だるまのようにふくれあがっていった¹³。聖徳太子は、平安時代中期には、日本仏教の開祖として、また観音菩薩の垂迹として、より広い範囲の人々から尊崇、信仰される存在になっていった。その要となる書物は、十世紀に四天王寺あるいはその周辺で成立したと推測される『聖徳太子伝暦』である。これ以前の聖徳太子の人物像はこの書物の中に流れ込み、この中で再編されていた。これ以後、聖徳太子信仰は、この書物を新たな起点として語られていった。

前田氏は、『今昔物語集』を解析して、国家至上主義の色あいが濃厚な作品だと論じた¹⁴。同書は、天竺、震旦、本朝の三国世界観に基づいて構成されており、三国意識、自国意識に基づいて全体が作られていると

いう。その本朝の部は、聖徳太子の話から語られはじめている。それは、「聖徳太子於此朝始弘佛法語」（卷十一第一）という題からも知られるように、聖徳太子を日本仏教の開祖と位置づける歴史観に基づいて書かれている。聖徳太子を日本仏教の開祖とする認識は、『今昔物語集』と同様に三国意識が看取されるという源為憲『三宝絵』にすでに見え、また慶滋保胤『日本往生極楽記』、鎮源『法華驗記』でも、聖徳太子の話が冒頭に置かれて、「日本」「大日本国」の仏法が語られている。これら『三宝絵』『日本往生極楽記』『法華驗記』『今昔物語集』の聖徳太子伝が大きく依拠したのは、『聖徳太子伝暦』だった。前田氏が説いたように、三国意識、自国意識の深化に応じるように聖徳太子はその大きさを増し、聖徳太子信仰が深化していった。

高僧連坐影像の図像学

高僧連坐影像は、どのように読み解くことができるだろうか。高僧連坐影像には天竺、震旦、和朝の高僧たちが描かれる。これは平安時代以来の三国意識の進展という文脈の中で理解することができる。また、聖徳太子が三国の高僧とともに描かれることは、三国意識の進展に連動して聖徳太子信仰が発展していったことから理解することができる。親鸞系諸門流は、ほとんどの門流が強い聖徳太子信仰を有していたから、むしろ聖徳太子を描くことが先にあって、三国の高僧たちはそれに連動するように描かれたと見るべきなのかもしれない。

次に、高僧連坐影像の構図構成はどのように理解されるだろうか。早島氏は、高僧連坐影像の構図は垂迹曼荼羅の影響によって成立したものであると論じた¹⁵。垂迹曼荼羅は、春日信仰、日吉山王信仰、熊野信仰、八幡信仰などが進展する中で、十二世紀末頃から作成されたものである。それらは多様な図様をとるが、神々を本地仏の姿で描く図様の場合、左右相称式構図をとるのが一つの大きな特色であり、中核を占める神（本地仏）は正面向きの坐像として描かれ、一部斜め向きに描かれる神が加えられる場合が多いという。早島氏は、延暦寺蔵「日吉山王曼荼羅」（十三世紀）、観音寺旧蔵（延暦寺現蔵）「日吉山王曼荼羅」（十四世紀）などを例にあげて、垂迹曼荼羅と高僧連坐影像との構図上の類似性を指摘した。これは従うべきすぐれた見解だと思われる。

高僧連坐影像は、神仏習合文化が進展する中で成立した垂迹曼荼羅の影響を受けて成立したものであり、早島説を敷衍するなら、その構図から考えて、曼荼羅の一つとして、さらに言うなら垂迹曼荼羅の一種として理解することが可能になる。このことは、親鸞系諸門流の歴史的特質を考える上で、重要な論点の一つになるものと思われる。では、そこに描かれる聖徳太子はなぜ垂髪の姿をしているのか。

二 垂迹としての聖徳太子

垂髪の太子像

高僧連坐影像や光明本尊に聖徳太子が描かれる際、太子は正面向きの立像で描かれ、また髪を二つに束ねて前に長く垂らした垂髪の姿で描かれる。さらに、太子の下部または周囲には、太子を礼拝あるいは侍坐する六人（もしくは四人）の侍臣が描かれる（ただし、光明本尊の中には勝鬘経講讃の場面が描かれる事例がごくわずかであるが存在する）。聖徳太子および侍臣の影像は、三国の高僧、さらには名号や如来像とともに描かれる場合があるが、また単独で描かれる場合もある。いずれの場合も、太子はこの独特の垂髪の姿で描かれている。では、この姿は何を表しているのか。

かつて、宮崎圓遵氏は、垂髪について「これは美豆羅に結ぶ準備的髪風で、石清水八幡宮の神像にもその例があり、平安時代の品格ある男児がこの髪に結んだ」と説明した¹⁶。これに対し、早島氏は、そうした理解は一般の俗人の場合には妥当するかもしれないが、聖徳太子のような特別な存在の場合にはあてはまらないと批判した。そして、垂髪の聖徳太子像は、太子を菩薩形に描いたものだと言及した。『尊号真像銘文』に収められる「皇太子聖徳御銘文」には、聖徳太子は東方日本国に仏法を流通させた「救世大悲観音菩薩」だと説く記述がある。「初期親鸞門流」では、聖徳太子は救世観音であった。ここから早島氏は、垂髪は菩薩の

髪型、なかんずく救世観音の髪型として描かれたものにほかならないと結論した。私は、この見解は妥当であり、従うべき卓見だと考えている。

垂迹の思想の受容と展開

垂迹の概念は、別稿で詳論したように、もともと中国仏教で説かれていた教学概念であった。この概念は、教学のレベルでは、日本に八世紀前期には伝えられており、智光など学僧の書物に用いられていた。「垂迹」の語は、そうした学僧による教学書を除くと、八世紀最末期の願文（大日本古文書『東大寺文書之三』四一頁、また竹内理三編『平安遺文』一、一七号、延暦十七年（七九八））に見えるのが初見史料ということになる。これに次ぐのが、釈一乗忠『叡山大師伝』（天長二年（八二五）頃の成立）の記述であり、それに次ぐのが光定『伝述一心戒文』（上巻は承和二（三）年（八三五）頃の成立）の記述である。この両書では、聖徳太子は慧思の生まれ変わり（後身）だとする話が述べられているが、そこで聖徳太子は慧思の「垂迹」だと表現されている。

「垂迹」の語は、このように天台宗を中心に受容され、日本国内で独自の発展をとげていった。ただ、当初はまだ「本地」の語は用いられず、また、「垂迹」の概念が、仏菩薩と神との関係ばかりでなく、仏菩薩と人、あるいは過去の人と現在の人との関係でも用いられた。やがて「本地」の語が用いられるようになるが、それは少し遅れて、十一世紀になってからのことと考えられる。

当初、聖徳太子は慧思の垂迹だと説かれていたが、やがて、そればかりでなく、救世観音の垂迹だと説かれるようになっていった。では、それはいつのことか。

救世観音

藤井由紀子氏によれば^⑬、聖徳太子を救世観音だとする最初の文献は『聖徳太子伝暦』だという。同書の敏達十二年秋七月条には、日羅が太子に対して、跪き、掌を合わせて「敬礼救世観世音大菩薩、伝灯東方粟散王」と白したとするくだりがあり、また推古五年夏四月条には、阿佐が太子に対して、右膝を地につけ、合掌敬礼して、「救世大慈観音菩薩、妙教流通、東方日国、四十九歳、大慈大悲、敬礼菩薩」と曰したとするくだりがある。

「救世」の語は、これ以前にも、『聖徳太子伝補闕記』に、母が太子を懷妊する時に出現する金色の僧の言葉に「救世願」と見えるが、「救世観音」となると、『聖徳太子伝暦』が初見だという。藤井氏は、「救世観音」なる尊格は、中国をはじめとして日本以外には存在せず、日本で誕生した概念であって、聖徳太子のみに適用される尊格名だと論じた。それは、聖徳太子の別名として成立した概念であった。聖徳太子を救世観音だとする言説は、十世紀に『聖徳太子伝暦』によって作り出されたものと理解してよからう。なお、太子を敬礼する日羅は百済の高官をつとめたとされる人物であり、阿佐は百済の皇太子とされる人物である。そ

うした人物を跪かせ、太子を敬礼させるところには、『聖徳太子伝暦』の自国優越主義の思想がよく表れているように思われる。

以後、四天王寺では、金堂安置の仏像の名称を救世観音とするようになり（これ以前は弥勒菩薩とされていた）、他方、法隆寺東院でも夢殿の中尊を救世観音と呼ぶようになっていった。これは、私見では、四天王寺の方が先に言い出したことで、それに対抗するようにして、あとから法隆寺東院が主張したものと思われる。四天王寺は天徳四年（九六〇）三月十七日に焼亡し（『日本紀略』）、伽藍の再建、寺の復興が大きな課題になっていった。『聖徳太子伝暦』、救世観音、『四天王寺御手印縁起』は、その頃に、四天王寺において、伽藍再建、仏法再興にむけて、相ついで作り出された新機軸だったと推定される。

早島氏が指摘、重視した『尊号真像銘文』の「皇太子聖徳御銘文」には、『御縁起曰、百済国聖明王太子阿佐礼曰、敬礼救世大慈観音菩薩、妙教流通東方日本国、四十九歳伝灯演説』文、『新羅国聖人日羅礼曰、敬礼救世観音大菩薩、伝灯東方粟散王』文とある。ここの「御縁起」が何を指しているかは確定しがたいが、いずれを指すにせよ、この文は『聖徳太子伝暦』に由来するもので、同書の救世観音に関するくだりそのものである。「皇太子聖徳御銘文」はそれに注釈を加えて、聖明王は聖徳太子を恋慕してその形を金銅で鑄造し、和国に聖徳太子が生まれた時、阿佐太子を勅使にして金銅救世観音像をおくった。これが四天王寺金堂の金銅救世観音像であると説明している。

これは、『四天王寺御手印縁起』に「金堂内安置金銅救世観音像、百済国王吾入滅後、恋慕渴仰所造顕之像也」と記される四天王寺の主張を継承するもので、四天王寺の説明に由来する記述であった。以上より、「皇太子聖徳御銘文」に見られる信仰は、四天王寺の教え、信仰と密接な関連を有していることが知られる。このことは、親鸞および親鸞系諸門流の歴史的特質を考える上で、大きな手がかりを与えてくれるだろう。

垂髪とは何か

早島氏は、聖徳太子が垂髪の姿で描かれることについて、これは救世観音であることを表現する髪型であると論じた。私は、この見解を支持するものであるが、私なりの観点からさらに二、三のコメントを述べておきたい。いわゆる飛鳥時代の様式を持つとされる仏像においては、菩薩像に垂髪が表現されることが少なくなく、しばしば蔵手状の垂髪として造形されていることが知られている。法隆寺金堂釈迦三尊像の脇侍菩薩像、百済観音像、東院夢殿救世観音像、菩薩半跏像（法隆寺献納宝物一五五号）、中宮寺菩薩半跏像など、みな蔵手状の垂髪が描かれている。ただし、それらの像においては、垂髪は頭部から横の方に肩をはうように垂れていくのが一般的である。それらの像には、また、頭部から前面下方に垂れているものが認められるが、それは冠帯（宝冠をとめる紐）であって、髪ではない。しかしながら、親鸞系諸門流の聖徳太子影像を描いた作者は、垂髪と冠帯とを混同混合してしまい、冠帯状の垂髪を描

いたのではないかと推定される。

四天王寺金堂の金銅救世観音像は、その後焼失してしまい、現在は村上内氏作成の昭和の救世観音像が安置されている。だが、幸いなことに、心覚『別尊雜記』にかつての像の姿が描かれており、また模刻像が複数現存する。そこから、その像が菩薩半跏像であり、垂髪および冠帯を有する像であったことが知られる。親鸞系諸門流の聖徳太子影像是、立像であるところが四天王寺金堂の救世観音像と異なるから、なお検討が必要であるが、それでもこの像などが念頭におかれて、救世観音にふさわしく、垂髪の姿で造形されたのではないかと私は考えている。

侍臣とその姿

それでは、侍臣たちはどう理解すればよいだろうか。彼らは、聖徳太子を敬礼するような姿で描かれている。これまでの考察からするなら、阿佐および日羅が聖徳太子を敬礼するのは、『聖徳太子伝暦』に描かれる姿であり、「皇太子聖徳御銘文」で説明される姿だと理解することができる。もっとも、各種の聖徳太子絵伝には、日羅の場面、阿佐の場面がそれぞれ別々の場面として描かれており、二人が聖徳太子を同時に敬礼するというのは、他に見られない。また、二人以外にも、蘇我馬子、小野妹子、学智、恵慈の計六人（あるいは計四人になる場合もある）が描かれている。これらをどう理解すればよいか。

早島氏は、宮崎圓遵説を継承、発展させて、兵庫県揖保郡太子町斑鳩

垂迹としての聖徳太子

寺所蔵の「聖徳太子勝鬘經講讃図」との関連を論じた。この図は、聖徳太子が三十五歳の時、勝鬘經を講讃したところ、花長が二、三尺もある蓮の花がふったという場面を描いたものであるが、講讃を聴聞する人物として、蘇我大臣馬子、小野妹子、山背大兄王、五徳博士学智、高麗僧恵慈の五人が描かれている。「勝鬘經講讃図」は、法隆寺の顕真『聖徳太子伝私記』によれば、法隆寺の舍利殿に描かれていたといい、顕真はそれを「曼荼羅」と呼んでいる。現在、法隆寺には、斑鳩寺蔵のものと同じ図柄の勝鬘經講讃図が所蔵されているが、これが南都の絵師の尊智によって承久四年（一二二二）に描かれ、舍利殿に安置されたものにあたるとする見方が有力だという²⁰。また『七大寺日記』（十二世紀初頭）によるなら、すでにその時点で、東院夢殿内にこの図柄の影像が懸けられていたという。とするなら、法隆寺では、十二世紀初頭までには、勝鬘經講讃図が用いられるようになっていたとしてよいだろう。法隆寺を中心 に用いられた勝鬘經講讃図は、聖徳太子の周囲に侍臣が描かれるという点で、親鸞系諸門流の聖徳太子影像と共通する。しかし、描かれる場面が講讃の場面であること、太子の姿がまったく異なること、人物の顔ぶれが合致しないことなどの重要な差異もある。

聖徳太子信仰は、四天王寺と法隆寺を機軸に展開していったが、両者はライバル関係であって、その基調には、協調関係というより、むしろ対抗関係が存在した。そのため、しばしば、相手側の言い分を否定したり、吸収しようとしたりする言説が唱えられ、それに適合するような法

物が作成、宣揚されていた。早島氏は、初期親鸞門流の聖徳太子影像の侍臣は、勝鬘經講讀図の五人の侍臣がしだいに變化して、日羅が加えられ、さらに山背大兄王が阿佐に転化したものだと言じた。

私は、四天王寺系の信仰と法隆寺系の信仰は、一方が他方を吸収、改変することによって、しだいに両者が混合されていったと考えており、六人の侍臣たちもそうして成立したのだろうと考えている。こうして、日羅と阿佐の二人に、山背大兄王を除いた四人が加えられ、彼らが救世観音としての聖徳太子に対して敬礼あるいは侍坐するという図様が誕生したと推定される。それは、四天王寺あるいはその系列において成立したのではないかと推定されるが、その成立過程はまだ十分に説明されておらず、今後の研究課題になっている。法隆寺献納宝物の「聖徳太子および五臣像」⁽⁴⁾（東京国立博物館法隆寺宝物館列品番号N3-1-1、絹本着色、鎌倉時代）なども、両者の影響関係の中で理解すべき作品と考えられる。

以上、いくつかのコメントを述べてきた。他にも、三国の高僧が現在につながるような七人に定型化されたのはいつのことなのか。その定型化された七人が見える『浄土高僧和讃』は親鸞の作と認めてよいのか、それとも後世のものなのか。影像に描かれる人物があるいは正面向き、あるいは斜め向きに描かれているが、その意味上の差異はどう理解することができるのか。親鸞は念仏聖であり、善光寺聖だったとする学説があるが、善光寺よりもむしろ四天王寺と密接な連関を持つ念仏聖だった

のではないかなどの重要な論点があるが、それらについては、今後の課題として考えていくことにしたい。

〔注〕

- (1) 宮崎圓遵「初期真宗の連坐像について」『光明本尊の構成』(『宮崎圓遵著作集 三 真宗史の研究(上)』思文閣出版、一九八七年)。
- (2) 信仰の造形的表現研究委員会編『真宗重宝聚英 八 高僧連坐像』同朋舎、一九八八年。
- (3) 早島有毅「総説 高僧連坐像」『中世社会における親鸞門流の存在形態——中太郎真仏を祖とする集団を中心として——』(注(2) 書所収)。
- (4) 早島有毅「中世社会に展開した親鸞とその諸門流集団の存在形態——浄土教の本尊研究の課題設定作業の一環として——」『藤女子大学紀要』四三、二〇〇六年。「九字名号を中心とした三幅一舗の本尊の成立意義——岡崎市妙源寺蔵本を中心素材として——」『藤女子大学紀要』四四、二〇〇七年。「一幅本三国菩薩・高僧・先徳・太子連坐像の成立と聖徳太子信仰」(中部大学国際人間学研究所編『アリーナ』五、二〇〇八年)。
- (5) 高木豊「鎌倉仏教における歴史の構想」(『鎌倉仏教史研究』岩波書店、一九八二年)。
- (6) 前田雅之『今昔物語集の世界構想』笠間書院、一九九九年。同「和漢と三国」(『日本文学』五一—四、二〇〇三年)。
- (7) 末木文美士「仏教的世界観とエスノセントリズム」『日本仏教思想史論考』大蔵出版、一九九三年。
- (8) 伊藤聡「大日本国説について」(『日本文学』五〇—七、二〇〇一年)。
- (9) 同「梵・漢・和語同一観の成立基盤」(『院政期文化研究会編『院政期文化論集 一 権力と文化』森話社、二〇〇一年)。
- 市川浩史『日本中世の光と影——「内なる三国」の思想』ぺりかん社、一九九九年。同『日本中世の歴史意識——三国・末法・日本』

- (10) 法蔵館、二〇〇五年。
横内裕人「自己認識としての顕密体制と『東アジア』」「東大寺図書館蔵覚憲撰『三國伝灯記』」「日本中世の仏教と東アジア」塙書房、二〇〇八年。
- (11) 平雅行「神国日本と仏国日本」(懷徳堂記念会編『世界史を書き直す日本史を書き直す』和泉書院、二〇〇八年)。
- (12) 大山誠一『聖徳太子』の誕生 吉川弘文館、一九九九年。
- (13) 大山誠一編『聖徳太子の真実』平凡社、二〇〇三年。
- (14) 前田雅之「三國意識と自國意識」「仏陀・僧・聖徳太子」(注(6)『今昔物語集の世界構想』所収)。
- (15) 早島注(4)「九字名号を中心とした三幅一舗の本尊の成立意義——岡崎市妙源寺蔵本を中心素材として——」。
- (16) 宮崎圓遵「初期真宗の太子像について」(注(1)著書所収)。
拙稿「垂迹思想の受容と展開——本地垂迹説の成立過程——」(速水侑編『日本社会における仏と神』吉川弘文館、二〇〇六年)。
- (17) 藤井由紀子『救世観音』の成立について(佐伯有清先生古稀記念会編『日本古代の祭祀と仏教』吉川弘文館、一九九五年)。
- (18) 福山敏男「初期の四天王寺史」(『寺院建築の研究』上、中央公論美術出版社、一九八三年)は、『四天王寺御手印縁起』について、「天徳四年の四天王寺の火災(『日本紀略』を経て復興された伽藍を眼前にして書かれたものである」と論じている。
- (19) 「聖徳太子勝鬘経講讃図(法隆寺)」(石川知彦氏執筆、『聖徳太子事典』柏書房、一九九七年)。
- (20) 「法隆寺宝物館」図録、東京国立博物館、一九九九年。
- (21) 「付記」本稿は、同朋大学仏教文化研究所共同研究プロジェクト「日本仏教の成立と展開」、および日本学術振興会科学研究費補助金(基盤研究(B)、研究代表者 中部大学教授大山誠一、課題番号二〇三二〇〇一七、平成二〇〇二年度)による研究課題「仏教東漸および中国思想の受容から見た聖徳太子信仰の成立と展開に関する多角的研究」の研究成果の一部である。

執筆者紹介

早島 有毅

(北海学園大学講師)

吉田 一彦

(客員所員 名古屋市立大学大学院教授)

塩谷 菊美

(神奈川県立茅ヶ崎高校教諭)

飯田 真宏

(特別研究員)

高橋 良政

(日本大学教授)

高橋 大樹

(仏教大学大学院博士後期課程)

鎌谷 かおる

(神戸女子大学非常勤講師)

郡山 志保

(神戸女子大学大学院博士後期課程)

同朋大学佛教文化研究所紀要 第二十九号

平成二十二年三月二十五日 印刷

平成二十二年三月三十一日 発行

名古屋市中村区稲葉地町七―一
編集者 同朋大学佛教文化研究所

所長 小島 惠昭

電話 〇五二―四一―一三三七三

発行所 同朋大学佛教文化研究所
印刷所 株式会社 一誠社